新板
絵入

御伽名題紙表

之

へ13
1.673
3

1673
3

沛伽名頭紙衣　同張　三之巻

第一

事社ヶ加判押付業ヶ備り金の祝儀
女房ハ蹄し抓て夫を引ふる嵐の沖揚
新文ヶ乃葉い庭へぬける男子ヶ英歩行
ゐて伝て伝ヶ嚴小詰るヶ新い新の投害

第二

実ヶ夫ヶ乃を探紙衣大長
乃実粉ひする女房い稼ヶを啓獅ヶの虫
揚金の新ヶ姫ヶ帝湘ヶ乃い大臣
亭きい耳の投ヶ実て女房の湯上

第三　合力を頼この小判五十兩の指の切賃

第四　仮りを包の百兩切て見せる合力

一　末社ごとに判押ば業を傳る合の祝儀

一切の人間男女もいひよりもうずぶしをきて
老人ゑる人万の藝去い者別常の町人合力のみ法ゆよ百姓
の脚をもって那波中に名を知くいぶき舟より家業にゆだん
ゐ。栄耀事についなる合をちきず。拵出て商人の繁と
なれる人のまに脚をもて親又写真くのるるしい秘意して
わき風ゆもあてはやうに言ら行い色ゆど一すにゆうけ出さ親
のみまは似おれ。言ゆ別ゆるのいを打推してさん親移み為
を拵拵いうれよ。美人をもべき事もゆうもにして指玉成人
して言ゆ法よ為て金紙費を舟紙を強美人ちてゆ入
りのよわず。せるのしをもどもぺづまう色牡ひと拵人るのい

おろかなるしもの我と思はしてうけ出しこの弱をのりこえぬ。情無てくすぐるとも。
よろいはよこいきめきたるしに。西方めよいはつるるしに。ゆるせばゆるせばぞ。
ひろうの数を作りて月をとど寄れて却うの花の太けいせいの初いはるいとて知
てかし化狐の跡よかるるぞ。くく情婦ぐ我とわんろ。はあげの嵐とうけて郭と
合点はるぐ池あげの青小袖とうぐ。はるぬじて跡ふうと同じ事にく。
世帯初ひける程の青ようとていひうるとそその嘆きぬぐすけみくい今
祝と元はうも。今日命と縁つ茶屋の沾い海さずて大分の拍人の山月を
待おぞうの人月とうの拍月さるはるは婦そはうり名い結くおるれ
だこそ。ゆれ我ものれ化塗で内のうを。いるるぞかるる。女房は性悪を
ものさせ。ゆれの表の跡く所作を欠。酒拍てかるる母の方の月あも言れ。
我拍よい正月ろ拍さんて表ぞだ。実方の祀の名代の山神をそそやるか
どそのろよ深ぬ去の月ろへ。毎のくに月よかりけそわせずいぬまいとまるる

ぜひ。拍ろ西方拍ひ数ろ花い表いあるる府ろくさ海とぞ。裏へろくい解別拍
くぬぬもろくちい人をるるやいかとうひ。ろ拍そけ色いほぬ中ひそうけく
表ろ人の表をはろく結けぬの邪魔とろく結敷とれひ。ゆるるのと鬱心の
あろ人れいひいれさ。方盆の脇い来盆のわげまきいゆひそ色にぬ女
帯きいめそよる拍ろれの表れよの布く来ているど。表ろうるれ
矣いせすいひき男いろ帯せ神ぬ。ゆるよい洞ろぶさせて拍んべ。ぬ歳にて
結けの初る事。ぬるくろ祈しなまさしるべ。塔てやけ里神法のろ
武表へ欲ぐ表ろけ祝ぬ。ろ海ぐ表拍ろ人て。表ぐ情へをぬて表ゆるるしぐ。
釈也れるのう表人でしとゆるぬ不と拍のんるいこうて月やんと釈又拍
ょ死ぬろるぐを卓付ぐ中魅ぐて方垂紀の松弁とそろくと海でろる
ぬ。拍のぐよまふ堀でも。善拍表けとれい堀が海ろぐ。ぬ拍とれて分別
ろぬ。ゆて拍ちがいろるいいて表。そ五でも海ろか。金ぐふくちてい。

けいせい愛つけうる様でいあるほどに考えの力義とやめて今のうさんお
さんまでひとりとうるうる所あるとぞ。あれ面倒知るうるうづさの方をぞ悔よ
今所のれりをてれるあく人を酒いしぞ。楽ぞや色のいいでいび結よ
ひまとぞ。新子よの軍法をせ来ちさ新て歳考て内くさそあるうきと。
新文のあいのぶいふ作るうて女夫くちいさいでうちひうのうしるれば紹百
用かうふてもぞ性ふ貧和がうけまびいのさんぶい月分の財とぞ出考よ悔ても
用格よ笑へぞ面意さのかうでいぞ作よいきまいて笑れし新文のうは
さでいひすこが結ねて妹い考んいゆね考ぞ笑い考の人といふの人考ろ
た天酒よ。格ふ作りの考義ふへけよ。九の用よ人といふの嬉笑うけてぞ
人にと新いうれぞ中れぞりとうるそものうぞ中ぬ人い法義の持者とう
かのうとうぞし結ふのうう年とて。面西紹と作うあとに入うえ日めく
人のうう年とあ人すうあう作うとうとうさ初て年中一いもまえ

あうさぞ作せるのひすこれぞ。ふ作考よ嘆ぞび。
為ふまき新を結るひすこうしいぞ考嘆ぞ。
うみ日読面の文用のうとぞうう和とうひとて。月
あいとまいて。ほいうど面ふい面世考の個性。ふ男也ぞうう文
考てあてぶ怖こ男のあうぞを考ぬ新文人今と用ゆにこあうは。
毎日出てかぶうるぶ考にあ人れ討男者とうひ付て。格ぶ新て出考行
をせいうせとうる松てゆうと考とうんうれび出う事のうう作なるのふ。
御二日毎て出うけぞ才に松びかさうしいゆて。ぞとい人今今紹の西結美
て行あうかぞくせと。書仁の結ハは考西紹のは人をんメ出て来て注を
を作いぞ御ふ松び三年方行て。百面分考て考笑新ひといべぞぼ人
の一ふとぞて。ぞ年とく信会。ゆぞ。ぞ会てあげませあてのこのでう松まい。
面元の御ふに元のうしに元御て松びゆうとう青めどもをていい。

いそぐとはるとをひとしなれば、ぜんあくにあらずとはいへども、
なりはひ、大坂中の出でとうけ、世にかくれなきしき出にてござり候ところ、
会せてをぜまをかとはいへども、
あるぜんきんこの家と手代弁蔵とて、
人会してあるらしいをもえ出でかく利付にて代銀一年延にて貸に私せ
候ところ、手代の弁蔵と申すものこれ有り、今日の方に
金の出でいたしまをかと、揚屋様の出でまをかとんでしまいたる出かた
抱付これなく、出でこの場でそしいたる和様、
様の月にあつかつ、手あいとうれぬ、ひとりとと合ておがまね
ふりこいぬ、今日中に書様やとゆ会せたるうえ、
書様拾よりて、この家の手代の方の氏名同じいとおなじくの出でおとく

お間かけらるべきの様子、明日おまいりとまをかの様子、
そしてお様をふさしの月どの様にこれまをかとてそこ出でなく
ゆるし、寺社の中にて、出でかく老とあるの様子。
乃蔵様の様子、弟やにうつて、
ちらく出でたる果のこと、
伝のうの様子、
まておりて、この様子、
も様子、
の氏同じて、
ます、
ぜんぜ、
月にて、
書様五百月に書様おまりかとなりますなり。

いろいろ
ぜんか始
みさき
もハやさいかとりとうえんせ
えん盛者
わつらう
ます
侍子あり
主ゆへ
あるる
おやうさで
ごさらふ
えらう死
まして
況人の
手枕なます
ほちそうに
なりまする
お酒が
とのふて
辰ゑ

先年兎角の弓に合ますと申ばかりにて、奏楽別る六貫七百目の利足二百
の内五百目にて一年に十二月分を渡す、六百八文とかりて、六百七十文足
し、残り二百目の妻子を養ひ、暮しかねて、ひとり出家して、お弟貫二百九十文。
六十目ばかりにて、食物八文銭の先上まで、十年に生付て、六貫七百目の利足
半四ヵ利人、四人の市郎さをして、ひるまの長代、ねみをたくて、酒とりて、男ばい
きげんをとり、ばいばいのいとなみと、三年と四年あまりてけりの久敷、人間絶たる拍
てあり、庭掃とて、酒をすまして、ひとりにて、大内の辞をとなえ、ひとり言はれ、市郎
伝のをとこ、家をとりすまして、紙衣をぬぎ、半尾をふすまさせまして、大内
又人を雇ましてあるまへ、ばかり、利代といふて、あんがあるせめるぼるそを尾せーお
祝として、素社はあるへ、三百文を、安アに、借れば、三年借りて、年賀といふて、年賀とふ
ゑ、三百文、祝ばかりにて、新つきぬ、ふ利の、ふとぶや、祝ばひあげ、ひとりの、ひとり
と、素社たさんへ、ばかり、上和の、伝よまうせ、ニ階の、三年、仕ろまたぶるの、拍

十あとい、人をとこ、ぞくひ、見をとり、ひとり、ぞ、あ、ふ、ぞ、ぞ、ぞ

さつよそをかどこをるかいみをほ歌のろよ月人を考てぱつとゆがてんでなを
せらるゝかい高人の代が義人の金をけとゆ同狂よ月を妻がきをと
ゆてこを自のまがうれるゆいかてゆつる風の男でわゝをるづゝころ
新つきをうけそ紙日のかをこそ高ひこをいすのゆ金出て
笑をかの色をころゆをぱこをいい歌つよ拍ゝをゝをついそ出ふい四をねけ
てお新屋信の月四をゝをゆゝかゝぱゝ気肯拍て金を笑ゝてあゝい絵ゝその女
帝をゝいひいるゝ拍るぱゝ大切かゝんをゆをゝをゝ。ろま拍いする手考ゝ女
のゝ家をゝいかしをゝをゝを拍づゝいかあゝをゝあゝて金笠をを巣にけてゝを
えゝして乃まをる女帝は名いをゝをゝ。三十ゝるゝゝ妻つめゝれゝ歌方ゝん
らゝをゝゆゝてゝをゝを新ゝて月の好高ふゝをゝて。栄耀に解の皮をゝを
べきゝ拍ゝをゝ巣ゝを月代ふかをゝを拍て居て皆ゝゝゝ。お巣換月で涼し
男すゝいかゝゝをゝを庚申の歌ゝ四ゝかて歌ゝをゝの四を月南をいゝす

きゝ様のひゝんだゝゝ歌つゝきてゝゝぱゝをゝをゝをゝ。迎ゝ。
家のゝをゝをを色て拍をゝをゝまゝいゝ歌月で絵ゝゝゝきゝるゝかゝてゝる乃拍
ひゝをゝをゝをゝを月代のゝゝゝゝゝゝゝゝ人の名仕様の拍ゝゝゝゝ。巣ゝ乃て
女帝笑てかゝをゝゝゝゝゝゝ別のかゝゝゝゝゝゝゝゝ

けるつぼのくちをあげ紙新月をとり刀の傳授してあるいぶのかくし男と
するといちべえこれを仙蔵といふものの也揚屋にいもうとけいせいをあげとりたてど
無事のあるべき筈なれども合点のあるべき筈なれども粉引てを新吉がの
ぎくわらくいぶ物をもつてどもあげまきが四流ろうくく出神兵ばさり揚屋へ
ゆけばおのじまの狂ぶし中いろいろもつてもあそいさげ太夫なたまのす
ばらしきをよてとり持さぶけいどに流ぶて出銭をとりまたいぶごまの異へ
と申太夫へ色せば昔ひろいびゆうろしたしこ高をびありろいあとぬるとて。
杓柄てとる紙いぶ引しをげこ高たらんとこるいの世ろしに喰い紙文
もわるぶこれ紙ろい才一年とをかたとうが姫ひびやぶでよいおれといふる
と無ぶろいるまとくくぶろいぎおろ。和尚あるあろ太伝郎でこあるとちう
ぬ月とてあそぶるよけ里のふ屋ともいてぶ。こん蔵国のよい粉。
ろんぶで伝紙ろさい肌ともちれどぶ命で金ぶる事けして一は世話をして。

こころとれでのけまさぶでろまり癖ぢのあ、一あされ海ぶ宮殿にて西ふ
吸紙ぢうぶいと家で移ろと同れて面失ろれろぶでおるろふ
てこちろろぶれでも紙しそぶるぶ地ぶいゆろ伝ゆろにぬでおるふぶろ
近対法をろいぶせろうぶよあの人るりにけ里で超常と住ふと部面の男を
知ねとこひぶろ百七に海ふとこいんぶこん分ろるゆそぶそくあの家に入ぶ
高宮の揚屋ろいい和世まのものいおるいれ世月伝ぬとろうまるとよい
ぶろに善と打い和ろふい太夫ぶ住伝のあにおげられで家にあるとゆろに
よてぶろるとあて嗚ふるりぶろにあて和れいぶいろゆ世でなとこいぶお者
表ふ面ぶ太耳へ入ろ男ぶ庭おと立てぶるろとやひぶ知やろふを
やそぶ先お見ぶろに門ぶ平あるのけまいぶ男のるぶ立れふろておるのい
ろれとおいちあるさぶそ和ひとこいぶ指ふと行ねぶ法でちれるろそいふて
世ゆろるされこゆふぶゆろく痛のあ家るれぶ苦くぬそいぶろくとぶこんせ。

おもてをあらはしたれば、ろうにあつてうれいとのはなしいてゝ、安堵いたしまゝ、それどもぞんぜんおもてをあらはしてもなを仇のゆくへをたずねるとあつて、ものをあらはしてこのかたと上洛するぞ、それにあがてさすがあつてうつて、時をのがさずぶつまぶしにして、ろうになつてゆくをやすめさせてちんちやくとあつまりどぶゝは、夢にゆめてれば、南蛮の女郎の身のうへ、今はそこで乳貴をわい、能くおそきをうらゆゝさいごはやはり今つゝてもあるいはなつてこそつゝしをたてもわかるれ。

胸にあがりてゝいぶ、君七代をも、命長四あるせのうと、四でもおんでおさゝるものゝそこのを、ゆゝきれ新てゝ、夢まあるとゝ、秘にてゝ、ゝそいのゝ。

南のゆいまの宝貴を捨てゝ、方の手いんゝ、ゝ、ゝ、

三　合力を後の小判五十両の指の切疵

郡司とゆて親の方を追おこれて。ゆくずのるい男をもおぐる。郡山まに男の一ぐるこれとゆてきりくいひとりに世界の新紙のるるに抵打を上さり。結接ぶ結るに親る行の金四十両と書付てけらくと四ど米を入月の金をもれ親の詳に合力せ代る者約ゆも世里でのるいすもても親の動面とゆぬゆるるるる人月のもるを。親の親とれれるのるるの長るるれに行るるに代世界の無性るの四の妻のいいりゆとるを。世界ようけ郡司ぬ。ゆるるのぬもたるぬゆけでゆれいるるれと指ゆるのぞ巳四六想気ていゆるいゆ言るまゆもゆてたゆ。今ていそるるるるるるるたるゆり世界の親の動面と親て。今い東侍るにひとるけてるるれに世るれ巳ぬゆ。ゆるい出人の小郡とれる君を判んでゆまるる正月とゆとゆる入月に。人るゆ千夜才言てゆらるれる。ゆのいぬでゆるれと笑て人。個てられて。

正月実とゆ月ゆるるまるるれゆ。親の動面とゆて。四を出るに付て。郡司ゆるに出人とする月るゆて。悔るる郡司ゆ人るれと形親てゆるるが出ゆるるて。郡山ゆるるるゆ侍ゆて。ゆるるゆ出人ゆるるゆ門とゆるゆてよゆれれゆ世るるゆゆ入ゆちるるる。ゆ侍ゆるゆゆゆるゆ人ゆゆゆ

ちぶいろ刀ゞ頬へ屎とれつてゆくるをてゆ刀て刀ゝて刀と様をゆ刀ゝ
ゞ表ゆゝしゝの方後で越さは今。戻されゝ胸ゝぶゝ刀ゞ立ゝとゝ。て表ゞ巧の
ゝ刀ゝとゝんゆゝてゝゆゞけゝきゞゞれゝゞゝゝゝゝゝ出て。考指のゝいゝとみをてゞ
指ゝ今ゝ日奥ゝ表ゝゝゝゝゝ伝孫の大ゝゝゝ今ゝ子ゝゝゝゝゝゝゝゝ切てゆゝゝゞ
ゝゝゞゝゝ者のゝゝゝゝゝ胸ゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝ

せんぞ社のものといってたいへんな内納つき合も大分でごさればかのあか
合力するとゆらぐとなって指とかけて伊与の大臣へ金四百両へ合力さ
といひうけとるを親方も我ゝをもさぞかしあげ代計も大分ものしべい
さうかづきそばいは命のおしやと御ありがあれば祝ひて大まがちゆうま
よりてと親方も欲ゆへ合点してはのるかと金銭やどにたまりてこのざま。
さるをてかくの大まが指ものとそ大体でなりていやうの様ようぬ来に男に
病と付きをてとう方ぶ訳とこれあゆりく考がゆへてたまの指かんちさい。
ゆへこの人今の考いひうけて合さにはうて伊与のあさん指かて今もう
ふてゆこさんゆんをてとそ金のたまが分中とゆ結ものふ廓やこれ
わづらいてをてとつき附ぶ里へ入ゆ大臣寺社の夏入わさるやいに動
南やうしてけはがゆうとて安命へ考ふいてそ人今で吟てあく仏云い男
でるいいうふ吟めが考いいてそばゆやうう合力さわて今日とこういふぐう

なりといふものぞやとそばおりゆくわてう天臣ぶまやつて伊与寺社のはが角い去
たてはおちやしてでこふかさりてかしは里へ来ふるもの分に下ろと指ものを
ろこい家れるのもそ社のるのとき方ちらでいるけ来ぶうを、和そまるい
さいてのぶう和ゝゆ男でいを色そとつるぞにはは里、のはとちもものふうの
色いたれにれ付てゆ指ひてす妻ふにのとづふとい我巧でちて来
だんぶとうもふ今るのものあふぶ仏云いまちとうの今ちうひは里で
お指かのをとてるちてのるゆちでいるいぶまく去い今ぞるたりてに
に来ゝ。考い紙てを極とつまんちいてのるゞ主軍であふぶ。
我ゆへよ御貸とおゞと安人のものはのよい今のうりに指切てんやいるゞ立ゝ
亭ゝを分が指量ゞちゞひいせまいぶそゆへ指と立ゞ考指ぶ指切ても
親方いを親を吟味せとへだなりてめとふふものぶもふてふ男でるい。
初ふふあいゆ命の命にぶ我分まに指ゝゆ切てどふ男いゆとふそ

のどけかるくるぶのてうふ我かづだをてて紙方に書て動さ身だやもの紙
俗まきまきまでぶのと考ることでいるいるいる

はつてさいこいそすひゆかなぞ紙方をやりもしろ以今でごさんそれば。
はんのいろまいごさんとあとぷのはここととてこいひわどさくしばゆ三てしゆし
ろとうばてぷくぞろ氏風ちろぶまりにくう

四　ゆうと包の百文切てゐ人金之申

はんをとゆろくとんくてゆ者の仕ひけれ十ひとびえとろとしけいせい笑
のんすくいうるかの助ってゆ仕ちのたんたのしどもいゆ神いうはぞ才と雑てゆうぶってのうゆ奥行笑ち大美白くしと学
ろうきいつとあの月れ出さいぷくびうぞぷえまってひつきそちろくゆた
みふどぷいんでちさんをふぷうねゆ粉ますしぷとのぞてゆ笑、それば。
月のあくみ亭をいゆ出すしちころにはしいるぷてろうとれろうのゆうす
大粉のお耳。ぷてあげそてく美とかの顔にをてゆ笑のこびうゆし
うまいろが宮屋のろひとぷちてゆうさんくのすめべぷかそよゆに

えてくろてとたぷおてるぞてゆくるいと屋ごみをれど蔵このの
はりぞひるく地お間ちるのあくぷとうみまるくちろれてのけかお
ぎるぷ四ちびくえそてはごさ屋をてぷ笑へまれに出れいぷたいん
ろうぞ笑てあまがおけぎまいとけぞうはやぶられてのどとゆ笑の後ちは
をいて。ぷまれてのけいぷ仕ちえ右ちろ分ひぷ金て月行ちのちぷまいひ
つけぷまぞそちまいいちろんぶ海でわくみひ和ちけ右ちけていくしう兎。
一せ武御ろ和ちんとぷ茂ちうかし四りくいて使ひちろいをと宮ぷ今日
月ちて今と東ちて春れいぷそろ和方れおてぷ侍ののちに後合ち
ちてたぷそちぶのまいまぞけのぞでぷまとろけくてくろ西ちぷくく和方のいと
ゆ笑けぞちぷまの高れ出ちのくちすぞ西くゆしいぷ仕しいぷ金豊のちまれちす
ろれいぷけろ行とちまぶくちろ和方の欲れちぞいゆまちてぷそとゆちさ
ゆ人ちまんぶくこの格とけてちてろんまんぷちろあぷとれゆくと。

行事のあ
金の包
太夫
一番うい

いんでいたそうしいろいろさうしかをとりてそのうちに金をとりてそのうちに
おてをなれしげすまれしは時接客と奥へはいりそれぞれ中ちの百目包
とうんぬかをとりて板ちてまぶりまぶりまぶの底にあるとりでいでいでなる程
小袖紙をとりてぐるぐるとしてかまをもちてちく金高の差引めり。格別のかえ
むかしに比べ物ぐるしけれども百目ばかりにてこれらと時ぬいるこの世の世の中ぬぐ
はずしてはいりまのかたのこのわりにはちはとこの色のかの判をまぬかれて
こうんとすると大たてこの業と抑へしかしてれく高くるこの色いかりこの版の抑屋
にてこの色のくの味とこの色とちるかの判をまぬかれまるまるはきどこのまよ
おいはりてこのまるるかれぬぐまとくいれてこのびとまるはれはこれもはいれはこの
しこの色家にてこいてんてなれしかわしいはりこの中ちにはびまちこのんよ
わかいてこんとこいはこまかまの刀がこのまつはれはこれの抑屋のかの抑もはこれぬ
高をいかがかの時家にこの抑とちはれもわるはこの金の抑のちるはる。

抑屋切てはそこの抑とこのちるはれはこのまかまのかまれのかとと
ちちちはちはちるの抑屋の抑屋と切てはそこの抑屋切てはそこの抑
小判抑わるこのはなるはこの抑屋の抑屋と抑屋の抑屋切てはそこの抑
抑屋金とはるかまの金とはるこの抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑
の抑屋の抑屋はるはの抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑
紙方の抑屋はまるの抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑
切てはまて抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑
まるまるのはるはるの抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑
しこの抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑
この抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑
判の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑屋の抑
あげまき包とそこのそこのそこのそこのそこのそこのそこのそこの

いてていそらをまつ合ぶゆまいそぶじまをぶじ和尚ぶ如仕形かいて
和らいしうをゆうるぶこの男もぶぶいの程宝ぶういそもぶて
いくけみていといてしべきうくるぶいふ結いいつめの男ぶやてぶいと戸
まをうしぶ中妻指切てうわまをゆぶいて湯ぶ今宝の妻ぶ山寺を
宝光ひうのかうんをぶ男い病と付らけ宝いるいをいまの浴ぶ行ある和で
あるぶうて出ゆう妻いををやてをぶ一ある行ゆ人宝の屋とるゆ西ぶ
みいようてゆ西男をうに指て来る色三の細工人に付ぶ寺塔とぶ刺れ三
さをて入て来こい逆留ゆ山里ゆ西ひぶうゆ一ゆげぶめいてぶ屋ぶ同じゆ中ぶ
して妻指ぶをうるぶ上べいけるの色うに中い宝のぶ刺とるゆ代ゆ和と切て
宝の屋とはうて入てるいぶる縁ぶ代ゆ今をと行てゆをるぶつ代ゆて
妻ぶ指ぶて留ゆ人いをて留ぶに代ゆ一宝のるいる塔ぶ宝の刺のゆういつう
いけるぶ代ゆ刺ゆ結ゆ考て男代ゆ晃ゆをとうぶゆ行ゆいぶ仕付ゆる

ゆ三ゆて宝ぶ結様ぶ小刺をゆ塔ゆをすゆ中ゆ宝の胴ゆゆいゆ深ゆ小
ぶ代ゆの宝塔ゆ指ぶ宝ぶ代ゆ男ゆ西の今ゆ西ゆ入ゆて来ゆ返
ゆ代ゆ入ゆ代ゆ出ゆていうゆるゆきうゆ男ゆをうゆをうゆこ信ゆくい来ゆをうゆ
ゆ来ゆ和ゆいゆうゆ和ゆ代ゆ十方ゆ和ゆの高宝ゆのゆ西ゆ宝ゆ代ゆ指ゆいゆ和ゆ
代ゆ代ゆ宝ゆ西ゆをうゆ代ゆ代ゆ宝ゆ代ゆ代ゆ宝ゆ代ゆ代ゆ宝

大行く様の小三郎とてもつてうぶもとの分ぐさ里（あれくるとねがぬ
きつう者方ぬも方。ぐひ手枝くごぞう。世界に実ぐないあくれくの使ちくとに里、
見踏めくこ者のいくの者が切れくとに。紀伊安ぶぬのくに指とぬて
あくとのぐとにげいるの高さ伝うにひもて。金てくふい高ひくてくつの辺。
世界ぐあのくあかれくくの。ふ輝く人の用くにくくくぬくくぬくくらて
なぐこちと上にくくに。ぬくくい年中の和日役日伝日とくくくてくくくぐてぐ扇
い紀方のあくくくくくれくも者れ使くいるるぬくくふ輝ぬもにあまくい潜と
らにけまぐ。元くくくこ言ぬにくくひい指くにぐくや紀方あげや細くくあま
関紀いくこくくくくいわ紀伝に世界世人ぬ世を伝て流活するとぐ紀
ゆくあの者にくくくこ者くくこぬくくぐに指くらくて合力に輝く
年あの人ぬくくくに者ますわくくれ一きくあまでぐくくれくくくくも輝ぐ紀
い動面伝れ流活くくて人くくれぬや世ぬ合力くくれくあまぐや

ないこなくくに実のないあまぐやくくくくくぐめくくくぐぐくくくにはをまくくを
かくくたあぐにはくくひくくくくく

ゆるつゝて有く祝ふ和のあそらに[illegible]ひかり紙のるのこそいかるが
他人のあよ旅今ひとり[illegible]化とつつこゝろでいつ親孝ゆるこゝろ[illegible]ゆりいせまい
あげまき[illegible]待あり一所よ[illegible]仕[illegible]てうへきこ[illegible]お[illegible]るのは源[illegible]合[illegible]ゝ[illegible]ろ
ろされしとそのの自に為うけてぷるまうう事和仕ゝてぶんざめろ[illegible]て
の月待[illegible]伊[illegible]人信口をあいそ[illegible]ろけ[illegible]さ[illegible]でいか粹[illegible]ふ[illegible]れねと未熟
ある月をろうて虎よ帰りけて福列[illegible]

巻之三終

▲鬼一法眼虎之巻　全部七冊　作者其磧

一ッとらう他て追あり乃達明ろう武義ゥ七ッ道具
ゆよ金てけ[illegible]ろう鬼法ろん色のるかに抑ろ勇士
只[illegible]ろのるこ天八独り[illegible]の時[illegible]振い色[illegible]
[illegible]りろくも色ハ形ろ[illegible]ねとれいのれい三階の大義ハ嫁入
ろ[illegible]れ[illegible]る出て[illegible]れ新[illegible]都向るれは求[illegible]